ICCS Journal of Modern Chinese Studies Vol.5 (2) 2013

調査報告

チベットの村落を考察する比較対照としての インド北部村落における調査報告

山口哲由[1]・野瀬光弘[2]・竹田晋也[3]

要旨

中国におけるチベット問題の根底には、村落における経済発展の遅れがその一因となっているが指摘されているが、チベットという過酷な環境において如何なる村落開発の方向性を見出しうるのかに関しては十分な議論がおこなわれていない。本稿では、チベット村落の発展方向を探る比較対照として、生態環境や地理的な条件が中国チベット地域と近似したインド北西部ラダーク地域において、2009 年から 2011 年までにおこなった村落調査の結果を報告する。

キーワード：山地、村落開発、インド北部ラダーク地方、チベット

Ⅰ．はじめに

大国として世界的な影響力を強めている中国にとって、国内の民族問題は懸案となっているが、なかでもチベット族の問題は北京オリンピックを境に広く報道されるようになり、現在でも四川省や青海省といった西部地域ではしばしば民族差別的な政策とそれに対する抗議が続いているとされる［1］。

チベット問題の根底には民族間での歴史認識の問題などがあるとされるが、一方で中国チベット地域の村落部における経済発展の遅れもこの問題に影響しているとされる。チベット亡命政府は、発展著しい中国のなかでチベット地域の村落は貧しいままであることを述べ、その要因として中国政府のチベットにおける偏った投資政策、すなわち投資のほとんどが都市部に集中し、工業開発やインフラ整備に使われてきた問題点を指摘してきた［1］。フィッシャー［2］も、公開されている統計資料を用いながら、チベット地域における経済発展の大部分が都市部における非農業部門に由来しており、大部分の人びとが従事する農業部門の開発が遅れていることを指摘してきた。

一方でゴールドスタインは、非農業部門の発展も村落からの出稼ぎなどを通して非農業部門に還元されていることを指摘し、また、近年は中国政府も方針を転じ、村落における住居や公共施設の整備に対する直接投資をおこなっており、村落における生活状況は改善しつつあることを述べた［3］。

これらの議論では、中国政府のチベット開発のあり方が議論される一方で、如何なる方法によってチベットの人びとの生活を改善することが可能なのか、その方向性は十分には明示されていない。ゴールドスタインは、出稼ぎを 1 つの方向性として挙げているが[4]、チベット自治区における村落からの出稼ぎ先は、言語や文化の違いのためにチベット自治

区内の都市がほとんどであり、その就業先は限られている。

中国国内のチベット地域には現在 500 万人以上だが、その多くは村落で生活していることを考慮すると、やはり村落を基盤として開発の方向性を模索する必要がある。

しかし、チベット地域の大部分はチベット高原に位置しており、大部分が標高 2,500m 以上にあり、気候は非常に冷涼で農耕に適した平坦地に乏しく、水条件も悪い。また、中国の経済発展の中心地である東部との距離は非常に遠い。このような不利な条件に置かれた山地での村落開発の難しさは、中国に限定されるものではなく、日本でも山間部の地域開発の遅れや過疎化が問題となっていることは言を俟たない。

山地では、地理的な要因によって土地生産性や労働生産性は低く、輸送コストも高くなるため、グローバルな競争力は低いことが指摘されてきた［5］。上述した中国国内のチベット族地域に関する議論においても、地理や環境に起因する村落開発の難しさを考慮せずにチベットにおける村落開発の問題点を議論しても、解決には結びつかないことは明らかであろう。

山地における村落開発はグローバルな課題であるが、現在に山地の状況を地域間で比較することにより、地域に生じている現象の共通点や相違点を明確にすることができ、それによって経済開発の方向性を模索することも可能になるのではないかと考えている。特に中国国内でのチベット地域の村落に関する研究は非常に限られるが、文化や生態環境の面で類似しながらも政体の異なるインド国内のチベット系民族の村落と比較することによって、環境や文化、政治状況を考慮した村落発展のあり方を探ることになるのではないだろうか。

以上の問題関心に基づいて、私は 2008 年からチベット自治区と隣接するインド北西部ラダークにおいて、質問票を用いた悉皆調査や地理学に基づく地籍図作成などによる社会調査に取り組んできた。前稿［6］では、1 つの自然村に焦点を絞った出稼ぎ労働や都市移住などに関する山地村落の社会的な事例報告をおこなったが、本稿では、そういった社会変化にともなって地域の農業にどのような変容しているのかを、2009 年 8 月、2010 年 9 月、および2010年8月におこなった調査に基づき報告し、今後のチベット文化圏における村落の比較研究資料としたい。

次の 2 節では、インド北部ラダーク地域の概要を説明し、3 節では調査をおこなった村落と調査方法を述べる。4 節では、前稿［6］に基づいた社会的な変化の概要を示しながら、5 節では、そういった変化が村落の農業にどのような影響を与えているのかを調査結果に基づき示す。6 節では、チベットやヒマラヤなどといった苛酷な生態環境にある村落での開発問題点を概観する。

Ⅱ．ラダーク地域の概要

ラダークはインド北西部ジャンムー・カシミール（J&K）州に属する地域である。チベット高原の西端に位置しており、インドと中央アジアや西アジアとを結ぶ交易ルートとして栄えてきた。かつてはダライラマ政権の支配下には入っていたこともあり、文化的にも言語的にも中央チベットとの関係が深い［7］。ラダークとは、主に現在の J&K 州に属するレー県、カルギル県からなる。ラダークはイスラム圏と仏教圏との境界にもなっており、西部のカルギル管区はイスラム教徒が多く、東部のレー管区では仏教徒が多くなっている。

J&K 州ではインドとパキスタン、中国が国境を接しており、ラダークでも紛争が繰り返されてきた。現在のラダークには大規模な国

境警備軍が駐留しており、経済的にも軍隊が重要な役割を果している。また、1960 年代以降はチベット動乱や印中間の紛争に起因する多くのチベット難民がラダークに流入しており、ラダークの中心都市であるレー周辺には数千人規模のチベット難民キャンプが形成されている。

ラダークはヒマラヤの主脈とカラコルム山脈に挟まれており、大部分の地域が標高 2,500m 以上に位置している。気候は非常に寒冷であり、さらに極度に乾燥している。チベット高原を源流に持つインダス川はラダーク中央部を北西方向に流れ、国境付近で流れる方向を変えてパキスタンへと注ぐ。

ラダーク内の地域は、人びとの生活や生態環境に基づいておおまかに 3 つに分けられる。1 つは南東部の起伏のなだらかな標高 4,000m 以上の平原であり、チャンタンと呼ばれる。人びとはおもに専業的な牧畜を営みながら生活しており、気候は地域内で最も寒冷である。チャンタンはチベット自治区西部の草原と連続する地域であり、人びとの生活形態もチベット自治区西部とほぼ同様である。

ラダークを貫流するインダス川両岸は乾燥した渓谷であり、河岸や灌漑地を除けば植生の乏しい砂漠のような景観が続く。人びとは標高 3,000～4,000m の河岸で灌漑農業を軸としながら、農耕と牧畜、交易を組み合わせた生業により生活を維持してきた。乾燥の度合いはラダークの方が顕著であるが、地形的な特徴や生業形態は、ヤルツァンボ川や長江上流域に位置するチベット村落に非常に近い。

インダス川支流のザンスカル川に沿った地域も同様に灌漑農業を主体とする地域であり、景観にも大差はないが、交通の便が非常に乏しいためにより経済発展が遅れた地域であり、現在でも道路が通じていない村落が多い。

ラダークの人びとの生活は、自給的な灌漑農業と家畜飼養、そこで生産された物資を交易することで支えられてきたが、近年はこういった生活も大きく変化している［8］。上述したようにラダークには大規模な国境警備軍が駐留しており、軍隊に入隊する若者や軍キャンプでの物資運搬などに従事する人びとが

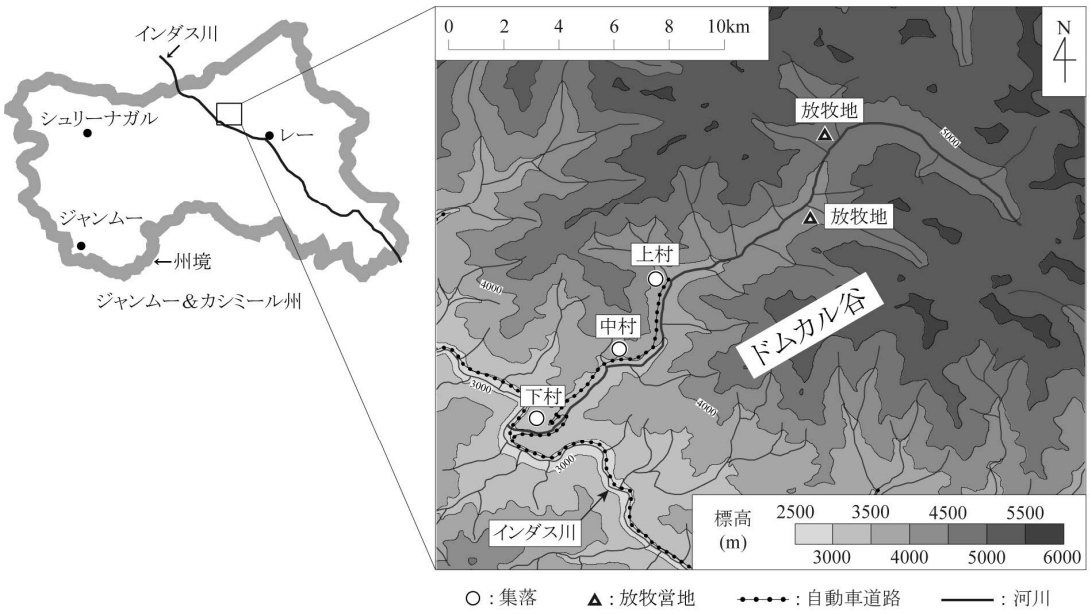

図1 ドムカル谷の地図

増えている。また、国外からのアクセスが難しく、政治的な影響を強く受けてきた中国国内のチベット地域と比較して、対外的にも開放され、伝統的な集落や寺院を多く残すラダークは多くの外国人観光客を引きつけており、観光は経済的に大きな産業となっている。

Ⅲ．調査地の概要と調査方法

筆者らは2008年からラダーク西部に位置するドムカル村において、土地利用や農外就業、居住状況に関する詳細な調査をおこなってきた（図1）。ドムカル村はインダス川支流の渓谷に位置している。この渓谷は標高5,000mの氷河に源流を持ち、インダス川と合流する最も標高が低い部分は3,000mほどである。長さ25kmほどの渓谷のなかに流れに沿って標高の高い方から上村（ドムカル・ゴンマ）、中村（ドムカル・バルマ）、下村（ドムカル・ド）という3つの自然村がある。2009年の時点で上村には81世帯、中村には41世帯、下村には81世帯が属していた。

ラダークは極度の乾燥地であり、河川沿いの土地や灌漑地以外に植生はほとんどみられない。ドムカル村の景観も、標高3000～4000mの河川沿いの灌漑地と集落が広がり、標高4,000m以上の河川沿いには家畜放牧のための自然草地が広がっている（図2、図3）。伝統的なドムカル村の生業は、山地混合農業と称される形態である［9］。集落周辺では農耕を営みながら同時に家畜も飼養しており、それらの家畜は夏には委託牧夫に預けられ、標高が高い自然草地で放牧される。家畜は、冬には集落近くへと戻ってくる。家畜の糞尿は貴重な肥料として農耕地に投入され、逆にムギわらは不足する冬季の家畜飼料に用いられる。こういった農業形態は、中国国内のチベット地域の東部や南東部でおこなわれてきたものと共通する部分が多い［10］。

調査では、まず自然村ごとに設置されている保健局（Medical Aid Center）からドムカル村に登録されている人びとの世帯リストを入手した。そのリストを基礎としながら、村落の全世帯に対して質問票による悉皆調査をおこない、世帯員の年齢や性別、職業、居住地などに関する聞き取り調査をおこない、より精緻な世帯リストを作成した。

農業調査では、解像度50cmのGeoeye-1衛星画像を下絵として土地所有に聞き取り調査を自然村の村長に対しておこない、村落全体の地関図を作成した。この図に基づいて、各自然村の村長に対して聞き取り調査をおこない、土地利用や農事暦の概要を把握した後、世帯リストに基づいて悉皆調査をおこない、各世帯の土地所有の状況や農耕から得られる収入額、家畜の飼養頭数やその近年の変化などを把握した。

図2 ドムカル・上村の集落と農耕地の風景

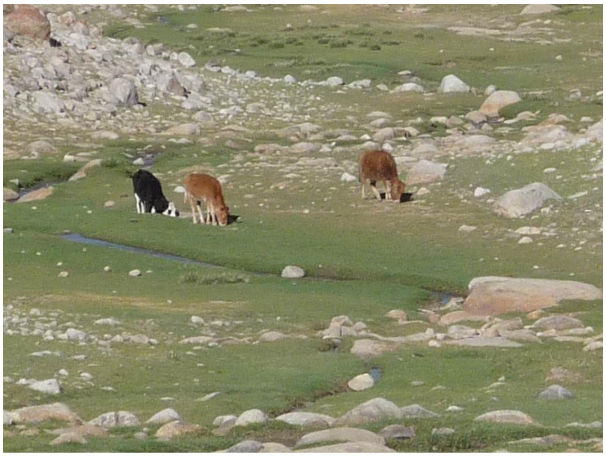

図3 夏季の放牧地として利用される自然草地（標高4,300m）

Ⅳ．ドムカル村の社会変化の概要

本節では、前稿［6］に基づいてドムカル村における社会変化を概観する。

ドムカルの3つの自然村には2009年にのべ1,269人が登録されていたが、実際にはおよそ半数の人間が就学や就労のために村落外に居住していた（図4）。この聞き取り調査では、1年のうちで半年以上を村落から離れて生活している者を村外居住者とみなした。ドムカル村に登録されている人数に基づいて世帯の平均規模を算出した場合、村全体で6.5人であったが、村内居住者のみに限定した場合には1世帯当たり3.5人であった。男女ともに最も村外居住者の割合が多いのは10～30代であり、6割以上を数えた。特に男性に関しては、10～50代まで半数以上が村外に居住していることになる。そのため、15歳から59歳までを労働人口とした場合、村内における世帯あたりの労働人口は2.1人であった。

これらの村外居住者が村外に居住する理由であるが、10～20代の場合の多くが就学のためであり、20～40代の場合のほとんどが就労のためとなる。

インドにおける教育課程は、6歳で入学してプライマリースクール5年、ミドルスクール3年、ハイスクール2年、ハイセカンダリースクール2年、カレッジ2年、ユニバーシティ3年となっている。ドムカル村には各自然村にプライマリースクールが設けられ、ミドルスクールは上村と下村に、ハイスクールは下村にある。しかし、より水準の高い教育を受けるために村落外の私立学校に通わせる場合も多く、また、ハイスクール以上の教育を受けるにはラダークの中心都市であるレーやJ&K州の中心都市であるジャンムーに学校に通うのが一般的である。

子供たちが村落を離れる傾向に関して、15歳以下の村外居住の割合は49%であるのに対して、15歳以上になると75%と急速に増加する傾向があり、ハイスクールへの進学を機会として村を離れる傾向があることを示している。

村外における農外就労に関して、上村での

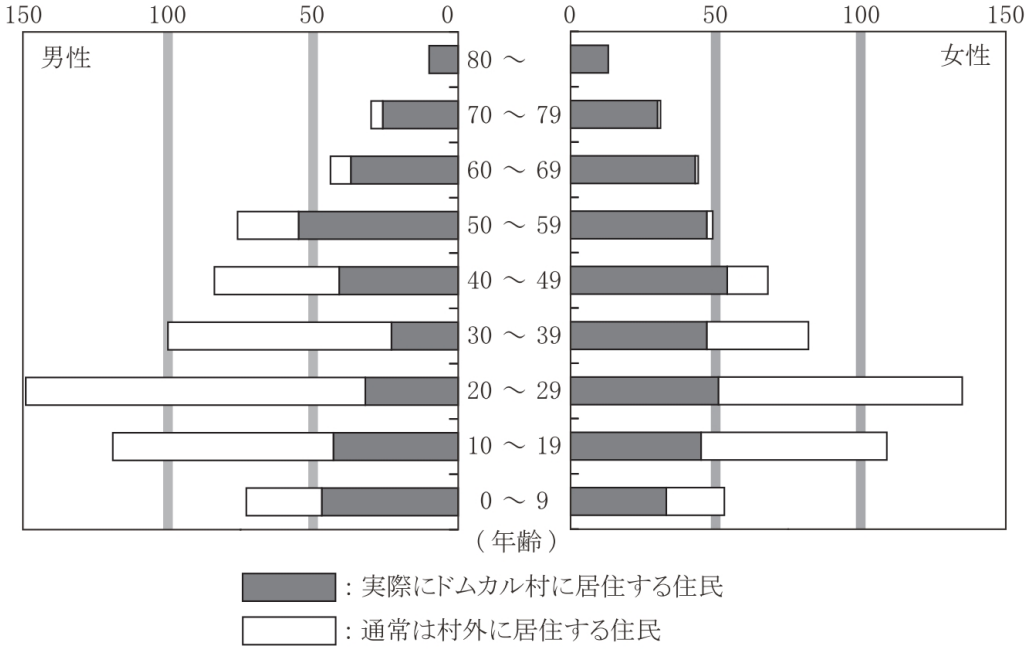

図4 ドムカル村に属する住民の人口構成

状況を示すと、就学以外の目的のために村外で生活する男性 116 人のうち、就労状況が明らかになっているのが 99 人である。そのなかで最も大きな割合を占めるのが軍関連の就業であり、41 人（41%）が従事していた。軍への入隊は 18～22 歳であり、軍人は毎月 350 ドル以上の給料を保証され、勤続期間は 20 年程度となる。退役後にも月額 100～150 ドルの年金が用意される。J&K 州における国境係争は現在でも続いているため、軍による求人は多く、かつ学歴もあまり影響しないため、ラダーク全般において若い男性に人気の高い職業となっていた。

軍関連の就業に次いで多いのが、ドライバーやガイドといった観光関連産業で働く人びとであり、21 人（21%）が従事していた。政治的な問題によって対外的な開放が遅れた中国のチベット自治区に対して、ラダークは 1970 年代から開放され、多くの外国人観光客を引きつけてきた。そのために現在でも観光業関連産業はラダークにおける主要な産業の 1 つであり、多くの人びとが従事している。

ドライバーの収入は車を所有状況によって大きく異なる。現在、レーに働くドライバーによると、自ら車を所有して夏季には旅行者のツアーに従事し、観光のオフシーズンである冬季には現地での荷物運搬に従事することで、およそ2,500 ドル／年の利益が得ていた。バスやタクシー会社に雇用された場合では 120～180 ドルの月収が得られる。ドライバーになるには運転免許が必要であるが、軍に所属しているときに免許を取得して、退職金で車を購入してドライバーになる場合も多くみられた。

また、ツーリストガイドとして働く若者も多く、夏季に多く訪れる外国人観光客を対象としてガイド兼通訳を担当する場合や、トレッキングのポーターや調理師を兼ねる場合もみられた。ガイドになるために資格は必要なく、旅行代理店に登録することで仕事が紹介されることが多い。

収入の面では軍関係での就労も魅力的であるが、安全で長く努めることが可能な公務員は最も人気が高い。ドムカル村出身者でも公務員試験に合格して地方政府の要職を担う場合もあるが、公務員の人数は地域ごとに限られている。また、私企業に職を求めた場合でもラダーク域内の企業は限られている。そのためにこれら公務員や私企業で働いていたのは 18 人（18%）であった。

ラダークの人びとは熱心に教育に取り組んでおり、今後も高学歴の人材が増加していくと考えられるが、就職先としての公務員や企業は限られており、今後の増加も考えにくいのが現状である。ラダークの人びとがデリーやムンバイといった低地インドに職を求める場合は少ないが、その理由として、低地インドではさらに教育水準が高く競争も激しいことに加え、文化や言語の違いによってラダーク出身者の職を得にくいとされる。

インド北部の辺境に位置するラダーク地域でも、教育や医療、日用品の購入のために現金の重要性は増しており、収入を求めて日雇い労働に従事する人も多くみられる。一般的に日雇い労働の内容は、道路の建設や補修、農作物の収穫補助、家屋の建設などである。ラダークには大規模な軍隊が駐屯しており、外国人観光客も多く訪れるので日雇い労働の職は多いが、ラダーク地域にはネパールや他州からの出稼ぎ労働者も多く、それらとの競合のなかで就業機会は限られてくる。レーでの日雇い労働に従事する村人の話では、日雇い労働で仕事が得られるのは一年で 2～3 ヶ月ほどであるとされる。賃金は、仕事や出身地に関係なく一日 4～6 ドルである。

また、日雇い労働ではなく、路上で観光客などを相手にしてアプリコットやクルミを販売したり、小さな商店経営に従事しているも

のも少なくない。こういった零細な商売や日雇い労働は収入が安定せず、夫婦がどうにか生活できる程度の収入であるとされるが、定職のない人びとにとって現金収入を得る貴重な機会となっている。

V．ドムカル村の農業の変化

(1) ドムカル村における伝統的な農業

ラダーク地域における村落の多くは、インダス川の両岸に位置しており、河川水による灌漑農耕を主体とした農林牧複合の農業システムによって人びとの生活は支えられてきた［11］。ドムカル谷には全体で 59 本の主要な水路が整備されており、灌漑受益地総面積はオアシス全体の 246ha に及ぶ。

図 5 には、自然村の村長などのキーインフォーマントからの聞き取りに基づく地籍図と農業の概要を示した。ドムカル谷の集落の標高差は最大で 1,000m にも及び、夏の気温差は 10℃になる。栽培される作物や樹木の自然ごとに異なっており、垂直的な変化を示す。下村では、主要な穀物であるオオムギの他にトマトやニンジン、カブなどの各種野菜の商

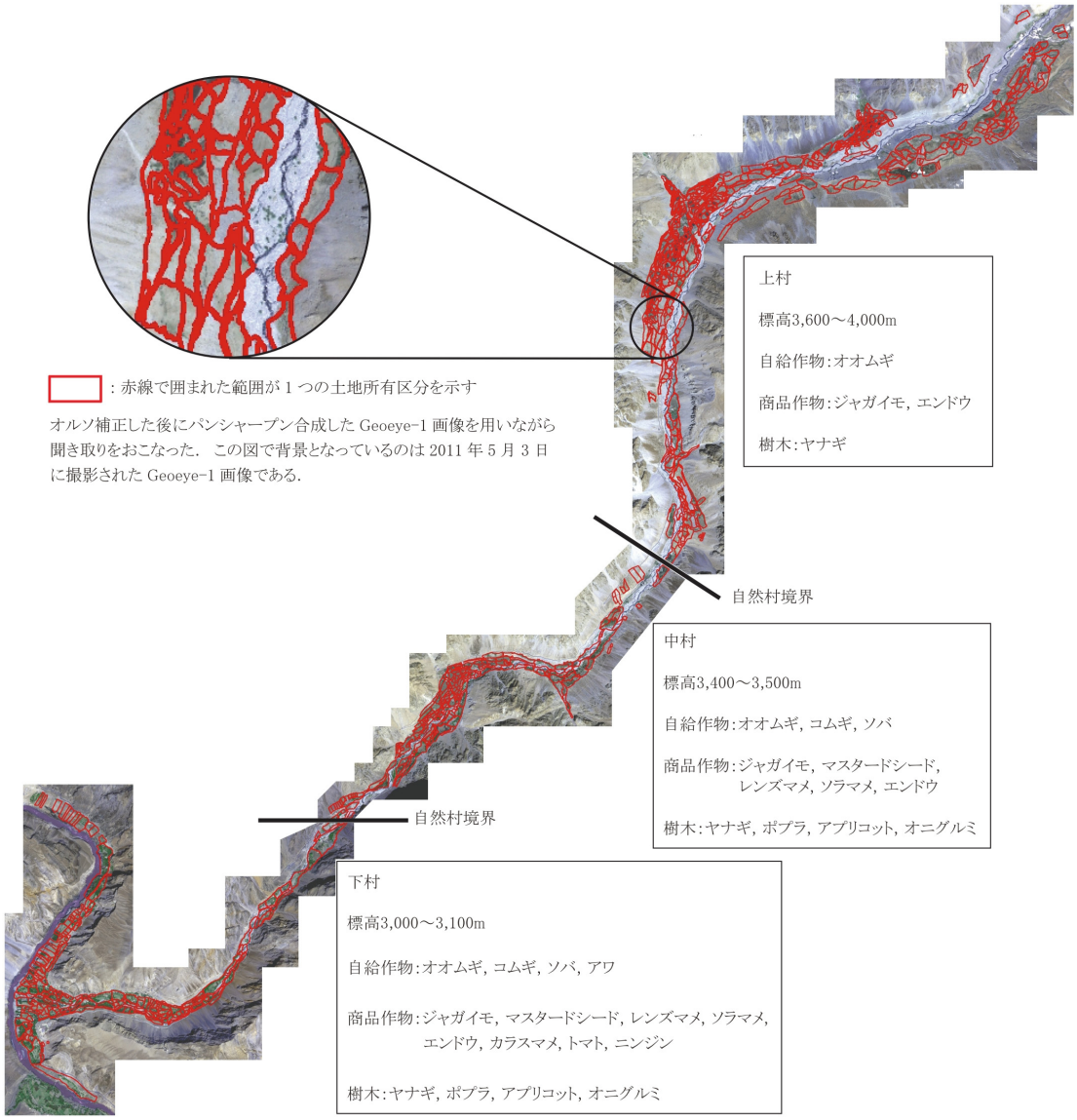

図 5 ドムカル村における地籍図の概要

品作物の栽培がおこなわれている。下村は果樹栽培適地でもあり、アンズの生産が盛んである。集落にはアンズの他にもクルミとポプラなどの樹木が繁っている。また、下村では二毛作が可能であり、オオムギ収穫後にソバやアワの栽培がおこなわれている。

標高が高くなるにつれて作物や樹種の多様性は減少していく。ニンジンやトマトなどの野菜栽培がおこなわれるのは中村がほぼ限界であり、アンズやクルミも同様である。上村での農耕はオオムギを主体としながら、近年導入されたエンドウ、耐寒性の高いジャガイモを作付けするのみであり、作物の多様性は非常に低くなる。栽培可能な樹木もほぼヤナギのみであり、二毛作も不可能になる。

作付けに関しては多様性が低い上村であるが、その地形は氷河に浸食を強く受けたU字谷であり、平坦な農耕地に恵まれ、日当たりは比較的良い。一方で、河川による浸食を強く受ける中村や下村は、狭隘なV字谷に位置しており、集落周辺の農耕地面積は小さくなる。そのために下村や中村の世帯も上村周辺の農耕地を飛び地的に保有しており、そこに出作り小屋を設けて耕作をおこなうことで、少ない農耕地を補完する垂直的な農地経営がおこなわれてきたとされる。

地籍図調査の結果に基づくと、上村の世帯における平均所有地面積は1.16ha、中村では1.37ha、下村では1.34haであり、大きな差はみられない。しかしながら、その所有地の場所は大きく異なっており、上村世帯は大部分（98.9%）が上村の範囲内にあるのに対して、中村では所有地の14.8%、下村では所有地の28.3%が上村の範囲内にあり、飛び地的な所有形態であった。地形的な要因によって中村や下村で不足する農耕地を、上村の土地を所有することで補ってきたことが解る。

上述したように標高4,000m以上に位置する上村以上の支流沿いの自然草地は夏季の放牧地として利用されてきた。ヤクやウシなどの大型家畜はより標高が高い放牧地（4,400～4,700m前後）で委託放牧されるのに対して、ヤギやヒツジなどの小型の家畜は上村の周辺の自然草地を利用した放牧がおこなわれる。

特に下村や中村の世帯は、上村周辺にある出作り小屋に滞在しながら農耕をおこなうとともに、小家畜の放牧もおこなってきた。これら小家畜は夜間には家畜囲いに入れられ、そこでの糞尿は農耕地の貴重な肥料となる。全ての家畜は、冬季には集落へと戻されるが、冬季の飼料としては農耕地で栽培された牧草（アルファルファ）やムギわらが与えられた。

表1に示したように家畜飼養に適した上村では家畜の数も中村や下村よりも多くなる。上村では世帯平均で11.6頭、中村では9.2頭、下村では6.7頭である。世帯平均では上村と中村に大きな差はみられないが、世帯数では上村は中村の2倍以上であり、上村を中心として多くの家畜が飼養されている様子が解る。

ここまで簡単にみてきたようにドムカル村

表1 ドムカル村の各自然村における家畜飼養頭数

自然村	ヤク	ヤク－ウシ雑種	ウシ	ロバ	ヤギ	ヒツジ	総家畜数
上村（79世帯）	1.2	1.4	1.2	0.7	4.6	2.3	11.5
中村（34世帯）	0	1.3	2.3	0.1	1.5	3.9	9.2
下村（55世帯）	0	1.1	1.1	0.2	1.1	3.4	6.7

調査では悉皆調査をおこなった，括弧内の世帯数は有効な回答を得られた世帯を示している.

では、標高差を利用した農牧複合の形態がおこなわれており、その形態は先行研究で指摘されてきたラダークの農業の形態と大きな違いはない。しかしながら、こういった伝統的な形が近年大きく変わりつつある。

（2）近年における農業の変化

2010 年には、抽出世帯に対して耕作放棄に関する聞き取り調査をおこなったが、3 つの自然村のいずれにおいても耕作放棄が進んでいた。上村では 29 の抽出世帯のうちで 10 世帯、34%が耕作放棄地があるという回答があり、中村では 13 世帯のうち 5 世帯 38%、下村では 14 世帯のうち 9 世帯 64%が耕作放棄地があるという回答であった。

上述したように、中村、下村も上村の周辺に農耕地を所有しており、垂直的に展開された農業経営をおこなってきたが、特にそういった飛び地での耕作放棄が進んでいた。その理由としては、労働力の不足であり、家屋周辺の農耕地を耕しながら、離れた場所での農耕を維持できないという答えが多かった。

先行研究で指摘されてきたように、ラダークにおける農業の根幹は垂直的な土地利用と農牧複合の経営形態にあると述べた。こういった農業は、多角的な経営によってリスクを軽減し、さらに農耕と家畜飼養とを複合させることで生産性を高めることができるが[9]、そこには多くの労働力が必要となる。上述したようにドムカル村でも高学歴化が進み、農外就労が広く浸透しており、農業に従事する労働力は少なくなっている。また、かつてのラダークでは一妻多夫制が一般的であり、それによって世帯内には多くの労働力が維持されてきた。伝統的な農業はそういった豊富な労働力を背景として営まれてきたが、一妻多夫婚は 30 代以降の世代ではほとんどみられなくなっている。これらの社会的な変化も、かつての垂直的な土地利用と農牧複合による農業形態を難しくしている一因と考えられる。

それではドムカル村の農業はどのように変容しているのかを明らかにするため、図 6 ではドムカル村における農耕からの収入状況を示している。ドムカル村では耕作放棄が進む一方で、数少ない労働力で農耕をおこない現金収入に繋げる努力もおこなわれていた。

農耕から得られる収入を 3 つの村落で比較した場合、最も標高が低い下村では平均 370 ドルほどを得ているのに対して、上村では 140 ドル程度しか得られていない。これは比較的温暖な下村では多様な作物が栽培可能なためにアンズやクルミといった果樹、ニンジ

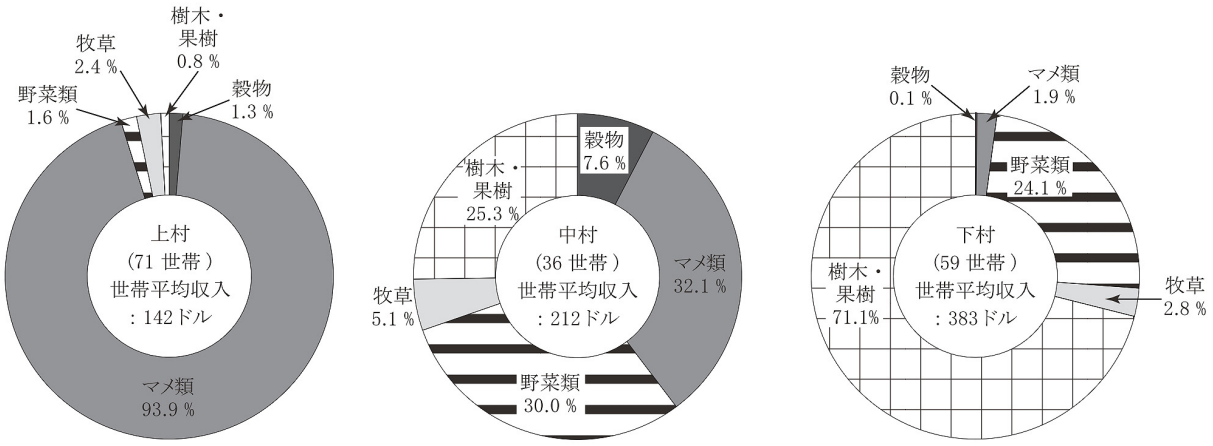

図6 ドムカル村の 3 つ自然村における農業から得られる現金収入の世帯平均金額との構成

ンやトマトといった野菜栽培が可能なためである。アンズは乾燥させた果実や種核が販売されており、大きな現金収入に繋がっていることが解る。また、収穫された生鮮野菜は周辺の軍隊キャンプや人口が集中するレーに出荷され、現金収入に繋がっている。

一方で上村では、栽培できる作物がオオムギかエンドウに制限されるため、現金収入に繋がるような農業経営の方向性は見出されていない。オオムギはかつての主食であり、主要な作物として農業における根幹を占めてきた。しかしながら近年は、主食はオオムギから食味の良いコメやコムギに移っており、特にラダークでは、インド政府がコメやコムギを安く配給する制度を実施しており、コメやコムギを 0.3 ドル／kg で購入できる［12］。そのため、近年の主食の転換が急速に進んでいる。

日雇い労働から得られる収入を考えても、配給で得られるコムやコムギは非常に安価である。ラダークにおける農耕では 5〜7 日に一度の灌漑が必要であり、傾斜地の農耕地は細分化されて労働効率は悪い。現在ではオオムギを耕作する意義は極めて小さくなっており、こういった事情も耕作放棄を助長するとともに上村の農業発展を難しくしている。

2008 年からは政府主導で耐寒性のエンドウ栽培が上村にも導入されたが、地域に適した栽培方法は確立されておらず、十分な収益には繋がっていない。

中村は、下村と上村の中間的な環境であり、アンズやクルミといった果樹、ニンジンなどの生鮮野菜も栽培可能であるが下村よりも環境条件は劣る。それゆえに試行錯誤のなかで農耕を現金収入に繋げる方向性を模索しており、果樹や野菜、マメや牧草なども手がける多様な構成となっている。

また、家畜の糞尿は農耕における貴重な肥料となってきたが、農耕の衰退は家畜飼養の意義の減少も示している。肥料以外にも、バターやチーズといった乳製品は食生活の必需品であり、村落内で自給されてきた。しかしながら、乳製品に関しても低地インドで生産された安価な商品が流通するようになっており、家畜飼養の意義はさらに低下している。ここでは詳しく述べないが、ドムカル村における家畜の飼養頭数は急激に減少しており、家畜飼養部門の規模縮小は顕著であるといえる。

Ⅳ．まとめ

以上、ラダークにおける社会変化とそれにともなう農業形態の変容に関する調査結果を示した。

かつての主食はオオムギであったが、現在では低地で生産されるコメやコムギに取って替わられている。オオムギの栽培には灌漑などの手間が掛かるうえ、斜面に位置する農耕地は一筆当たりの規模が小さく、機械化などによる生産の効率化は難しい。さらには配給政策も相俟って非常に価格の安いコメやコムギに対抗できない。このためオオムギの農耕地では耕作放棄が広がっており、特に上村周辺には耕作されず乾燥して白く変色した農耕地が目立つ。農耕の衰退は、混合農業として共存してきた家畜飼養の衰退とも関連しており、家畜頭数の著しく減少していた。

山地や高地の農耕が、平坦地や低地の農耕と比較して生産性が低くなることは先行研究でも指摘されており［5］、グローバルな競争にさらされた場合は経営を維持していくことは非常に難しい。この状況は中国でも同様である。例えば、筆者が調査をおこなった雲南省迪慶チベット族自治州の事例では、2004 年当時で省南部の標高が低い亜熱帯地域で生産されたコメが 0.5 ドル／kg で販売されており、それがオオムギに替わって主食となりつつあ

った［12］。迪慶チベット族自治州におけるオオムギ栽培の意義は明らかに低下しており、主食としてよりも地酒生産の原料としての栽培が主要になっていた。

ドムカル村では 20～40 代男女の過半数が村外で働いており、労働力もより効率良く収入を得ることができる非農業部門への移動が生じていた。中国国内のチベット地域でも同様であり、上述の迪慶チベット族自治州では農牧業からマツタケ採集への労働力の移動が生じていた［13］。伝統的なチベット村落では、マツタケは重要視されていなかったが、これが日本に輸出されるようになってからは多くの現金収入をもたらすようになった。多くの村人がマツタケ採集に従事するようになったため、伝統的な農耕や家畜飼養では労働力が不足し､徐々に衰退する傾向がみられた。マツタケの他にも青海省や四川省のチベット地域では冬虫夏草の採集がさかんにおこなわれ、多くの現金収入をもたらすようになっており、農牧業からの労働力の転換が報告されている［14］。また、チベット自治区などではドムカル村と同様に都市部への出稼ぎの増加も報告されている［4］。

上述したように、山地における伝統的な農業は標高差によって生じる多様な環境を使い分けることで成立してきたとされるが［9］、そういった農業では多くの労働力を必要とする。かつてのチベット地域では世帯内に多くの労働力が維持されてきたが、現在では婚姻の形態が変わり、さらには子供たちの進学率の増加、農外就労の増加によって、かつての農業形態を維持できなくなっていることも農業の衰退や村落の開発の遅れと関連していると考えられる。

ドムカル村では、村落に居住する若者が減少するなかで、農業から現金収入を得る方向性を模索しており、かつての垂直的な土地利用に基づく農業から、都市や軍キャンプへの野菜や果樹、材木や牧草などを販売する農業へと変容しつつあった。

しかしながら、この対応にも村落の標高によって差異が生じており、上手く方向性をみつけつつある下村に対して、現金収入に繋がるような作目をみつけきれない上村という対比がみられた。そこには垂直的な生態環境の違いが働いている他にも、道路などインフラ整備状況も関連していると考えられた。

山地における村落の発展には出稼ぎなどの農外就労が重要であることは言を俟たないが、村落における農業そのものの発展方向を模索する場合には、村落を取り巻く社会環境と生態環境のなかで考察していく必要があり、そこに如何なる要素が影響しているのかを考えていく必要がある。

特にチベットーヒマラヤ地域では、政治的な問題も多いために詳細な村落調査が少なく、その開発を考えるうえでも事例の積み重ねが重要になると私は考えている。本稿で示したのは、村落に農業の概要を示すうえでの限られた資料のみであるが、今後もドムカル村における詳細な調査を継続することによって、中国や他のチベット文化圏の状況と比較することによって、山地村落における発展の方向性を考えていきたい。

脚注*

[1] 愛知大学国際中国学研究センター。
[2] 人間文化研究機構・総合地球環境学研究所。
[3] 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科。

*参考文献

［1］大川謙作「チベット問題における経済言説の再検討」『中国 21』34，2011，163-184。

［2］Fischer, A. M. “Population invasion” versus urban exclusion in the Tibetan areas of western China. *Population and Development Review*, 34(4): 631-662. 2008.

［3］Goldstein M. C., Childs, G and Puchung Wangdui. Beijing's “people first” development initiative for the Tibet Autonomous Region's rural sector--a case study from the Shigatse area. *The China Journal*, 63: 57-75. 2010.

［4］Goldstein, M. C., Childs, G. and Puchung Wangdui. “Going for income” in village Tibet: a longitudinal analysis of change and adaptation, 1997−2007. *Asian Survey*, 48(3): 514−534. 2008.

［5］Jodha, N. S. Mountain agriculture. Messerli, B. and Ives, J. D. (eds.). *Mountains of the World: A Global Priority*. Parthenon Publishing Group. 1997. 313-336.

［6］山口哲由「ラダーク地域における村落の変容　―山地における人と環境の結びつきに関する考察―」『ヒマラヤ学誌』11, 2009: 78-89.

［7］Cunningham, A. *Ladák, Physical, Statistical, and Historical, with Notices of the Surrounding Countries*. W. H. Allen. 1854.

［8］山田孝子『ラダック　―西チベットにおける病いと治療の民族誌』京都大学出版会, 2009.

［9］Rhodes, R. E. and Thompson, S. I. 1975. Adaptive strategy in alpine environments: beyond ecological particularism. *American Ethnologist*, 2(3): 535-551. 1975.

［10］山口哲由「チベット東部地域におけるヤク―ウシ雑種の生産と利用―雲南省北西部・中甸県の事例を通して―」『エコソフィア』11, 2003: 85-100.

［11］月原敏博「有畜農業と家畜種―インド, ラダックの農―牧連関―」『人文地理』46(1), 1994: 1-21.

［12］平田昌弘「インド北部ラダーク山岳地帯の移牧民の生業構造　―ドムカル村における食料摂取の視座から―」『ヒマラヤ学誌』11, 2009: 61-77.

［13］山口哲由「中国雲南省のチベット族村落における移動牧畜の現代的意義―その乳生産量からの検討―」『人文地理』63(1), 2011: 1-21.

［14］Winkler, D. Yartsa gunbu (Cordyceps sinensis) and the fungal commodification of Tibet’s rural economy. *Economic Botany*, 62(3): 291-305. 2008.